

MAGAZINE FOR FRENCH BULLDOG LOVERS

# ブヒ BUHI

ブヒ  
Vol.  
05  
OAK MOOK 188



こんにちは！  
うちのゴ自慢  
みんなの愛ブヒ  
WINTER  
勢ぞろい！

New Project  
街ブヒ  
そこそこで見かけた  
元気ブヒたち

## フレンチブルは目を輝かせて あなたを好きだと言った

特集「ながいき」長寿ブヒを目指して、いまできること。

ありがとう！  
感謝をこめて。  
「夏彦ファミリー」  
特製BUHIステッカー  
入っています。



## 003

# そうだそうだ トレーナーの なおこさんに 訊いてみよう

プロトレーニング・メソッド

「しつけと心地よいマナー」

犬のしつけと飼い主のマナーについて、同じ志を持つ仲間達と作り上げてきたイベントである「犬のいろは しつけ&マナーin潮風公園」(東京都立潮風公園)。

それぞれ異なるバックグラウンドと団体で、ゴールは一緒でもそこにたどり着くまでのアプローチが異なる考え方を持つ4人のトレーナーが集結。しつけについてディスカッションをすることで、飼い主さん達に、自分と愛犬にとって一番合った方法や、相性のいいトレーナーに出会おうお手伝いが出来ればという思いがある。それと同時に「飼い主のマナーアップ」についても考えようという業界初のコラボ企画イベント。

そのイベントを通していつも考えることがある。「犬のしつけ」ってなんだろう。「飼い主のマナー」ってなんだろう…。

たとえどんなに高度な訓練を受けていても、競技会で高成績をおさめる優秀な犬とハンドラーであっても、日常生活において飼い主さんのマナーに対する意識やモラルが低ければ、全くトレーニングされていない、そう、マテも何も出来ない犬と一緒に出来ないだろうか。

トレーニングで教えた行動を、いつ、何処で、どのようなシチュエーションで使うべきかの判断をするのは飼い主であり、犬ではない。指示を出す側の判断やモラルが問われるのではないかと思う。

公園や広場などでアイコンタクトも完璧な美しい脚側歩行(ヒール)が出来ても、人や自転車や他の犬が行き交う公道で、リードを長く伸ばして犬をフラフラ歩かせていては何の意味もない。そういう飼い主と犬の横を歩いている人達が、実はさりげなく迂回して通り過ぎてくれていることに、飼い主は、気がついているのだろうか…。

「犬のしつけ」よりも、一番難しいのが「飼い主のマナー」。マナーに対する考え方は人によって認識が異なる。何をOKと思うか、何をNGと思うか。犬を飼っている人、飼っていない人に関わらず、周りを不快にさせない事が大前提。

私が経験した2つの例をご紹介します。

例1●犬を飼っている知人に「あのカフェは、店内も犬OKだよ」と聞いたら、こう答えた。「あそこは『店内犬OK』と謳っているけれど、店内で犬が吠えるのと店員が嫌な顔をするからダメ。犬OKカフェではない」

さて、皆さんはどう思われますか？

「犬OK」のカフェというのは、犬が吠えても、あるいは、リードを長くしていたり飼い主がしっかり犬を管理していない為に、隣のテーブルのお客様に飛びつくなど、何をし

てもOKという意味の「OK」ではない。ましてや、最近はずがに見かけなくなっただとはいえ、カフェ内でペットシートを広げるなんて…。食事をするところですよ。

今や日本の文化になりつつある「ドッグOKカフェ」は、犬連れのお客様がほとんどであるために、多少の吠えや隣のテーブルにいる犬へのご挨拶は「気にならない」レベルにある。または、吠えてしまった犬の飼い主に対して、愛犬家同士の配慮から「あら、あら、抱っこして欲しいのね」あら、びっくりして吠えちゃったのね」可哀相に。ごめんね」などと、励まし(?)の言葉まで飛び出る。これではおそらく、犬を飼っていない人は「ドッグカフェ」には行きにくくなるだろうし、犬を飼っている者同士で固まることも、本当の意味での



model KANA

今回のテーマは「しつけとマナー」。どちらも飼い主である私たちが忘れてはならない大切なこと。少しの気遣いが周囲の心を解きほぐします。それは、本当の意味での人と犬との共存を実現させることにも繋がるのです。



「人と犬の共存」ではないと思う。

例2 ●先日フランスのパリ市に行った時のこと。フランスは本当に「犬天国」である。しかしフランスの「犬天国」は日本のそれとは全く異なる。パリの殆どのカジュアルレストランは、店内への犬の持ち込みを特別禁止してはいない。公共の場においてはマナーを守る飼い主が、しっかりとトレーニングされた犬と共に入店するために、周りの迷惑になることがあまり無いからだろうか。

とある普通のレストランにて。私の隣のテーブルでは、ひとりの女性が若い雄のジャックラッセルテリアを連れていた。その女性は別に、犬連れ同士でカフェに来たわけではなく、犬を伴っていない友人たち数人とワインを飲みながら食事を楽しんでいた。2時間ほどの食事のあいだ、私はその存在にまったく気がつかなかったぐらい、犬は静かにテーブルの下で伏せていた。

そして彼女は、たとえばしつけ教室で習うような、「マテ」や「オスワリ」などの犬への指示を一度も出していなかった。だから私も犬の存在に全く気がつかなかったのだ。そ

のテーブルの人達も、周りのお客様も、店員さんも、飼い主自身でさえも、犬なんか居ないかのように、いえ、犬がそこに居るのが当たり前のように振る舞っている。犬を気にしたり犬を触ったり、犬の話題になることもない。

さすがに2時間が経過する頃ともなると、犬も退屈してきたのか、ほんの一瞬だけ、それもすごく小さな声で「ピー」と鼻を鳴らした。その瞬間。飼い主の女性はものすごく素早いタイミングで、周りに迷惑にならないように静かな、しかし犬には伝わるように威厳のある声で、一瞬だけ叱った。もちろん犬はビタツと静かになった。隣のテーブルの私と目が合った飼い主は、「ごめんなさい」と静かな声で言い、軽く頭を下げた。

そこには、理想の「人と犬の共存」があった。

「しつけ」と「マナー」は常に一体であって、別々のものではない。一緒になって初めて機能するのだと思う。



川野 名子

アメリカ、カリフォルニア州にてドッグトレーナーのライセンスを取得。フランス人とアメリカ人訓練士のもとで、軍用犬、警察犬の服従訓練や、問題犬の矯正を学ぶ。現在、カワノ e-ドッグの専属ドッグトレーナー。

★株式会社カワノ e-ドッグ

☎03-3630-6725

Fax 020-4623-6423

<http://www.k-e-dog.com/>

犬の権利が認められるには、飼い主が犬に対して義務を果たす。それが「しつけ」という「しつけ先進国」フランス流の考え方。カフェでくつろぐ主と足元でゆったりと過ごす愛犬との心地よい距離感。そんな犬文化ごと輸入したドッグ・トレーニング・スクールです。プロのしつけ経験も豊富！